

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	王 憶氷
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 森鷗外の初期文芸批評における漢文学受容の射程			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授 溝淵 園子		
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授 佐藤 利行		
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授 本田 義央		
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授 下岡 友加		
審査委員 (Name of the Committee Member)	名誉教授 河西 英通		
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、森鷗外の初期の文学活動について、従来の文芸批評研究と鷗外の漢文学研究とを架橋し、比較文学の受容研究の立場から再検討するものである。批評や随筆において言及された漢文学や漢学者を取り上げ、鷗外の蔵書やそれらへの書入れ、また同時代の作家の言説を手がかりとして、翻訳、修辭、考証といった複数の位相で検証している。</p> <p>本論文は、序章と結章を含む全九章で構成されている。</p> <p>序章では、研究の背景、目的と意義、先行論の整理及び問題提起、研究の対象と方法について説明する。</p> <p>第二章では、明治二十年前後の日本の文壇における文芸批評や漢文学の状況を概括し、鷗外の文芸批評の位置づけを確認する。続いて、幼少期からの漢学経験と鷗外の教養の形成とを連結させ、漢文学受容の基層とその後の文学観への作用を指摘した。</p> <p>第三章では、鷗外の「現代諸家の小説論を読む」における小説『貞初新誌』、『石點頭』、『水滸伝』の引用をもとに、小説の理念を論じる際の漢文学の摂取法を考察する。鷗外の漢文学に対する懐古的な趣味と回想的な引用の技法に、引喩の手法からの影響があることを見出した。</p> <p>第四章では、「明治二十二年批評家の詩眼」での明代の詩人及び宋代の文人への言及や、『梁谿漫志』の引用の特徴を分析し、鷗外の批評に用いられた修辭的技法を抽出する。また、鷗外蔵書の『梁谿漫志』への書入れをドイツ留学後のものと特定し、それらの内容から、西洋の審美的基準で漢文学を捉え直すという変化が見られることを明らかにした。</p> <p>第五章では、「聊齋志異の翻訳」を取り上げ、古典の翻訳と読解の傾向について考察する。鷗外は『聊齋志異』の翻訳を例に、当時の文壇に普及していた創作と翻訳との混同に反論し、それらの線引きを唱えようとしたと論じる。蔵書への書入れから、『聊齋志異』に向ける鷗外の関心は話型にあり、『聊齋志異』の翻訳を同時期の創作「舞姫」の構想に活用した可能性にも言及した。</p> <p>第六章では、清代の『槐西雑誌』に注目し、鷗外の志怪小説集に対する関心の所在を検討する。批評「しがらみ草紙」の本領を論ずる」での漢文表現や、手沢本の『槐西雑誌』への書入れから、中国清代の考証学の影響が当時の日本に及んでいた跡を読み取った。</p>			

第七章では、鷗外の批評における『氷川詩式』の援用の方法と読解を分析し、東洋詩話の位置づけを考察する。鷗外の「詩学材料」には、受容した西洋の詩論を媒介として再発見した東洋の詩話の世界観と技法を、自らの文芸批評に組み込もうとする特徴があり、それは東西文学を往還させつつ持論を打ち出すための試みであることを述べた。

第八章では、矢野龍溪『想起録』に対する鷗外の「想起録」を中心に、漢文体の考証随筆を援用した随筆批評の手法を分析する。鷗外の読書スタイルに学問的アプローチの特徴があること、また漢文の考証という営為が鷗外の内面の安定と結びついていた可能性があることを提示した。

第九章では、論文全体を総括した上で今後の検討課題を述べ、研究の展望に言及する。

以上のように、本論文は、鷗外における漢文学の受容の程度や範囲を測定しつつ、鷗外がそれらを読み替え、戦略的に批評に取り込み、自らの小説の理念や構想を打ち立てていく過程を跡付けた研究である。先行論との関連づけや資料の提示方法等に課題が残るが、受容から創作へと至る初期の鷗外文学を、丹念な資料調査と読解に基づき、批評と漢文学との結節点から複層的に炙り出そうとした意欲的な論文として高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)